第 6 回 KOSMOS フォーラム
基調講演「ヒューマンサイエンスから見たいのち」

講師　馬場　俊彦（名城大学大学院教授）

皆さん、こんにちは！　お忙しい中、よくおいでくださいました。私、今日で 72 歳と５カ月と 19 日目になります。年齢を申しましたのは、自分が今日まで本当によく生きてこられたという実感からでございます。白状しますと、実は私は 28 歳のある日、人生に行き詰まり、自殺をしようと思ったのです。それで頸動脈を探してよく切れるナイフを当てました。でも、そのとき死ねませんでした。それどころか不思議に立ち上がれたのです。ものすごく元気が出たのです。すると人生が不思議に展開しはじめました。そして 72 歳の今日まで来ました。今日は『新しい生命観』とありますが、人間の‘いのち’というものがどのくらいものすごいか、しみじみと自分の人生を通して感じてきた思いでございます。

‘いのち’を「見る」ときのいろいろな‘囚（とら）われ’

今日の題である『ＫＯＳＭＯＳフォーラム、21 世紀の新しい生命観を探る』、私はこれを何度も見るたびに、すごい題だな、と思います。この題を裏返して言えば、「20 世紀の生命観では、新しい 21 世紀はやっていけないよ」ということではないでしょうか。すなわち、「20 世紀の生命観」のままだと、自然破壊もどんどん進む。もう一つ大切なのは、私どもの人間らしい本当の幸せな生活が壊されていくのではないか、ということです。ですから、この問題を考える、新しい生命観を探る、ということは、今日、根本的に重要である、と。では「20 世紀の生命観」のどこがまずかったのか？

私が思いますのに、‘いのち’を見る「見方」に問題があった、と思います。「人間」というものを、どうも表面的に見てきたのではないだろうか？深いところ、大切なところが見えないできたのではないだろうか？と。娘の入学で、ある高校の入学式に参りました。校長先生は立派なお話をなさいました。次に立たれた教頭先生は、「わが高校のこの春の進学率は、国公立何％、私立何％、浪人わずかに何％」というお話で、おや、まあ、と思いました。３番目にお立ちになった教務主任の先生のお話を聞いて、びっくりしました。「皆さま、お母さま方の中には『うちの子はやれば出来るんですけど』とおっしゃる方がかなりいらっしゃいます。でも、『やれば出来る』なんていうのは何の役にも立ちません。大切なのは、出て来た点数、これだけでございます」とおっしゃったのです。「やれば出来る」という子どもの隠れた素質、それへの親の信頼など、全部無視です。大切なのは「出てきた点数」だけ。私は、これで教育者か？教育ができるか？と思いました。けれども、その先生をお責めするわけにはゆきません。これが現代の価値観ではないかと思うのです。これは大変なことです。そういう狭い価値観に囚われて人間というものを見るときには、表面しか見えない。そうすると、隠れた、これから現われ出ようとしている素晴らしい素質・可能性は、全然見えない。だからそれを信じて育てようとすることもないことになります。「点数だけが大切」ということ以外にも、私どもはさまざまな狭い見方、価値観に囚われて人間を見ている。だから「いのち」の本当のところが見えていないのではないでしょうか。それで、いろいろな囚われを、仮に捨てる、

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

捨てきるとすれば、‘いのち’の本当の姿が見えてくるのではないでしょうか。そう思わずにいられないのは、私自身の体験からです。あの自殺寸前のどん底に落ち込んだとき、そこから立ち上がることができたばかりか、今までにない不思議な元気が内側から湧き上がった。すると外側でも信じられないほど運命が明るい方向に展開し始めた。それを見たとき、それまでどうしようもなくみすぼらしく見えていた自分の中に、私自身も知らなかったいのちの大きな力が実は秘められていたことを、大きな驚きとともに知ったからです。そしてそれ以後、今日まで、この驚きをもってこの人生を毎日生きて参りました。とりわけ学生さんたちに接する時には、まずもってこの「人間に秘められた‘いのち’の素晴らしさ」ということを思わずにおれませんでした。

人間の‘いのち’の本体は喜びを実現する力：　それを妨げる「囚われ」の３種類

そんな思いでこの 38 年、学生さんたちに接しながら「人間とは何か」を常に学び続けてきました。そして今の時点で痛感していることは、「人間の‘いのち’の本体は‘喜び’だ、あるいは、その喜びを実現する不思議な力だ」ということです。その喜びは大きく３種類あると思います。お手元のプリント（19 ページ）をご覧ください。喜びの第１は、まず、「この人生、この世の中で、このかけがえのない自分というものを本当に生かして自分らしく生きる喜び」です。喜びの第２は、「周りの人と心の深いところでつながり合って、心が通い合って生きるうれしさ、喜び」、第３は、「美しい大自然に包まれて、心通いながら生きる喜び、嬉しい人生」です。これこそ、「花と緑の大自然の中で生きる人間」というこのフォーラムの中心テーマになるのではないかと思います。しかし、そのいのちの喜びの発現を妨げているものがある。‘いのち’を見る目が囚われている。そしてその囚われは、喜びの３つに応じて３種類あると思います。まず、第１、「自分」を見る目が、自分ながら囚われていないでしょうか。第２、「周りの人を見るときに囚われた目で見てはいないだろうか。第３、「大自然」を見るときにやはり、囚われた目で見ているのではないだろうか。そのことを実例で考えてみたいと思います。

第１　自分を見る目：「自分は独自の存在、自分を辱めない見方」

皆さんのお手元のプリント（19 ページ）で、１番目、自分を見るときの囚われと書きました。《実例：トシヒコ君》と書きましたけれど、私です。私は自分の目が囚われていたということに気が付いてから人生が変わりました。

（１）日本敗戦の大ショック―人生の土台を求める

先ほど申しましたが、28 歳の時にのどを切ろうとしました。いきさつはこうです。私は、昭和 20 年、日本の敗戦の時には中学１年でした。恐ろしいショックでした。ついこの間まで先生方は「天皇陛下はかしこくも現人神（あらひとがみ）であらせられる。オマエらの本分は、お

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

国のためにいのちを捨てることだ。分かったか!！」と厳しい声でおっしゃっていたのに、８月 15 日を過ぎたら「天皇はただの人間でした。キミたちは死ななくてもよろしい。よき民主社会の市民として……」と言いはじめられた。「何だ!?」と思いました。大人の言うことをもろに信じていていたらどうなるか。世の中はものすごく変わる！それで私は、子どもながら思いました。「自分の人生の土台になるものは自分の責任で見つけて、確かめて、生きる。これしかない」と。そしたら、不思議ですけれども、高１になった時に、名城大学設立に参加されていた柴山昇という経済原論の先生が近所におられて、「遊びに来い」とおっしゃって、仲間たちと 4 人でうかがいました。先生は、「よう来た、よう来た。ところで諸君、何しに来た？」と開口一番おっしゃいました。びっくりしました。「先生は経済学の先生と伺いましたので経済学などを一つ...」と言うと、先生は「ワッハッハ... いやそれはキミたちにはまだチト難しい。いやわしはキミたちにいいことをしてあげようと思って待っとった。君たちに本を読む力をつけてあげようと。これからの日本がこの焼け野原の中から立ち上がるためには、キミたちのような若い諸君が自分の頭で物を考える人間に育ってくれることが是非とも必要だ。そのためには、まず第一級の本をしっかり読む力を見につけることが必要だ」とおっしゃいました。そしてジョン・ヘンリー・ニューマンという方の「大学教育とは何か *The Idea of a University*」の一部を英語で３年間かけて学びました。その趣旨は、「普通の考えでは、大学というところは、‘多量の専門的知識を習得するところ’だ。しかし、ただ知識を雑然と集めるのではない。学び取ったすべての根本にあるものをつかむ。その力を与えるのが大学だ。人生をその根本から見通す力、それを哲学という。これが身に付いた人は、どんな問題にも正しい対応ができる。何が起こってもうろたえない。将来を見通す。自分以外の人たちの考え方が理解できる。人生を高い視点から見通し、堂々と確信を持って生きることができる」ということでした。「ボクの求めていたものはこれだ！」と思いました。しかも、それを教えて下さる柴山先生は、まさにその堂々たる人生を生きる人の手本でした。それで、高校２年のとき同級生のＮ君が「馬場君、キミ、大きくなったらどんな人間になりたい？　あんな人みたいになれたらいいなと思う人が君のそばにみえる？」と言ったとき、思わず「みえる、柴山先生！」と言いました。でもすぐ反省しました。「でも、ボクは頭が悪いからいかんわ。先生は大学の教授でしょう。ボクは到底なれないもん」と言いました。するとＮ君は、じっと私を見て、「馬場君、キミでも頑張ったらなれる……かもしれないぞ」と言ってくれました。嬉しかった。「なれたらいいな！」と思いました。16 歳のときでした。そうしたら何と、その 18 年後、34 歳で名城大学の教壇に立っていました。そして、柴山先生に教わったニューマンの『大学論』を英語の教科書に使っていました。本当に不思議でした。‘いのち’は不思議に自分の憧れを実現してゆく力を秘めている。鳥肌が立つ思いでした。

（２）哲学を学ぶ

‘いのち’というのは、ものすごいと思います。しかし、34 歳になるまでが大変でし

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

た。戦後の貧しさと混乱の時代に 11 人家族を養う責任を負っていた父は、私が大学に行きたいと言いましたとき、「大学など行かんでいい！」と言いましたが、諦めずに頼み続けると「そんなに行きたいか？わかった、国公立に限り一遍だけ受けさせてやる」と受験を許してくれました。嬉しかったです。ところが、受験にあたって専攻を決めきれず、とりあえず将来針路変更に便利だというコースに入りました。それは将来法学部・経済学部に進むコースでした。しかし、2 年生の秋いよいよ専攻を決めるとなったとき、級友たちの熾烈な「出世競争」に驚き、ひるみました。それと、ニューマンの教えを心に抱き続け、あらゆる事の根本は「人間の心」にあると思い始めていたので、心理学かと思い、講義を聴きましたが、「ネズミと学習」の実験の話で、「自分の求めているのとはどうも違う」と思いました。それで柴山先生に相談したところ、先生はじっくり私の話を聴いてくださり、「それは哲学だ。哲学科に行きなさい」と言われました。「先生、哲学って、一番頭のいい人がする学問と違いますか。ボク、頭悪いから駄目です」と言いましたら、先生は「学問は頭の良し悪しとは関係ない。やるか、やらんかだ。お釈迦様は言われた。学問をするのに大切な素質は『愚の如く、魯の如く、ただ相続するを以って最上となす』と。馬鹿と言われようが知的障害者と言われようが、一日も休まず、こつこつ続ければ必ずモノになる。キミはそれだ」と言われました。それで哲学科に進みました。ところが先生の話とはだいぶん違い、哲学科の学生は飛びっきり頭がよくて、ついていけませんでした。本当に辛かったです。友達は本を読むのが早い。私はものすごくのろい。友達があきれるくらいのろい。ある友人 I 君は私がいつもある本を抱えて歩いているのを見て、「キミ、その現象学をやるんだね、それでその本、どれだけ読んだ？」「（３カ月で）12 ページ」と言ったら、もうあきれ返りました。それで「キミは精読主義なんだね」と言ってくれましたが、「でも、速読も必要だ」とも言われました。

もう一つのろいのはレポートで、友達は３日でさっと書くようなレポートを私は１月かけて、それで期限に合わないことが時々ありました。それで卒業論文は大変でした。しかし、ありがたいことに、助けてくださる方々がありました。お世話になっていた小さな教会の牧師本間誠先生と、先生の紹介してくださった哲学科の先輩Ｎさんです。このお二人の励ましがなかったら、留年していたに違いないのですが、締め切り５分前に事務局に何とか提出できました。そして何と、修士課程に入学でき、その上、特別奨学金までいただくことになりました。

（３）28 歳の挫折

ところが、喜びもつかの間、修士課程１年の途中で指導教授に急死されてしまいました。そして、新しく主任になられた教授から、「キミの特別奨学金は、何かの間違いだ」と言われました。それを聞いた助手の先生は、「馬場君、主任教授ににらまれたら一生浮かばれんぞ」と言われました。「浮かばれない」ということは、どこにも就職できないということです。修士論文は誰にも指導してもらえず、提出したら、恥ずかしいけれど「良」を

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

つけられました。それはつまり、博士課程には入れてやらんということです。修士修了と同時に失業です。家庭教師と、本間牧師のお骨折りで、ある大学の夜学で１コマ非常勤講師をさせていただきました。そんな中で、何とか博士課程に入りたいと思って、ある助教授の先生のところにこっそり相談に行きました。そしたら「馬場君、その後、どれくらい勉強進んでいるかい」とおっしゃったので、「実は将来が心配で心配で、心が集中できなくて……」とぐずぐずと言いましたら、「キミの話を聞いていると、キミはいよいよジリ貧だ。悪いことは言わん、早いところ方向転換を考えないか」と。「方向転換って何ですか？」―「まあ、学者として身を立てることをあきらめて、どこか拾ってくれる会社でも探しなさい」と。私は何も言えませんでした。それは私にとって、おまえ死ね、ということです。学問しか生きる目標がない人間ですから...。とにかく就職を探しましたけれど、ありません。

（４）「ここで死んでたまるか」

とうとうある晩、本当に自分は駄目だ、人生の道を踏み誤ったと思って、のどにナイフを当てました。でも死ねませんでした。まず浮かんだのは父と母の顔です。戦後間もないころ、ものすごい混乱の中で大家族を抱えて養ってくれて、大学へどうしても行きたいという私を許して、学資まで作って大学へ送り出してくれた両親の苦労が、まったく水の泡になります。私は、頭が悪いのに周りの人たちの忠告も聞かず哲学に飛び込んだので、死ぬのは自業自得です。「ざまあみろ」というところですけれども、しかし、そんな自分に苦労の中から学資を送り愛を注ぎ続けてくれた親の気持ち考えたら、絶対そういうことは許せんと思いました。もう一つ、不思議なことに――これが人間の‘いのち’の不思議さだと思いますが――この辺（腹の片隅）で声がしました。「ここで死んでたまるか」と。それで死ねませんでした。

しかしそうは言っても就職できませんので、もうどうにもならないと思って、その晩泣き出しました。ボロボロ泣いているうちに、不思議なことですが、フト思い浮かんだことがございます。それは長らく世話になっていた本間牧師のある日の説教でした。背の小さい先生です。「皆さんの中に、ご自分のことをつまらない人間、出来損ないの人間、いないほうがいい人間と思っていらっしゃる方が、ひょっとしたらいらっしゃいませんか？もしいらっしゃったら、その方は大変な考え違いをしていらっしゃいます。その方は、ご自分の目でご自分をご覧になって、そう思っていらっしゃるだけで、もっと大きな目、宇宙くらい大きな目、いや、宇宙をお造りになった神様の目から見たら、あなたはなくてはならない大切な人です。神様は、どの方にも、あなたではなくては果たせない大切な役割――『ご用向き』と明治の言葉でおっしゃいました――を与えてお造りになりました。だから、あなたがいないと、神様の世界はあなたの分だけ不完全になります。ゆめ、考え違いをなさいませんように」というお言葉でした。500 回以上は聴いた先生のお話の中で、よりによってその時の私にピッタリのお話が、その晩フト浮かんだのです。不思議です。

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

今思うと、人間の潜在意識の、‘いのち’の働きだったと思います。

（５）「ボク、神様に言うことがある！」

それで「先生はあんなことをおっしゃった。神様が造った？それならボク、神様に言うことがある」と思って、下宿の４畳半の窓を開け、真っ暗な夜空に向かって、初めは小さな声で「神様、あんた、おるの？　おらんの？　いくら頭で考えてもよう分からん。でも、もしおるなら、言うことがあります。神様、あんた、私を造ったそうですね。頼んだ覚えありませんよ」と言いました。よく言ったもんですけれども...。「頼んだ覚えもないのに、あんた、勝手に造った。だから造った以上、責任を取ってください。あんた、役割とやらを与えて造ったそうだけれど、それを今果たさずに沈没寸前です。あんた、見えとるか？造っておいてコロッと忘れとるのと違いますか？忘れとるなら、この際思い出してやってください。道を開いてやってください！」と、だんだん声が大きくなって叫んでおりました。絶叫です。どうにもならないから、魂が叫び出したのだと思います。返事はありません。机をバンバンたたいたり、頭を柱にガンガンとぶつけて、壊れるなら壊れろと思ったけれども壊れません。とうとう畳の上にひっくり返ってドタバタやりました。返事はなかった。けれど、クタクタになったときにフトまた思い浮かんだのは、「神様が造った？それなら、こいつ（＝自分）は神様の作品か。あまり勝手なことを言ったらいかんナ」ということです。そして気がついたことは、私が自分を他の人と比べて悩んでいたということです。一番は、私の本の読み方が遅いと心配してくれたＩ君です。とても頭のいい人で、しかも人柄が立派で、皆さんから愛されていらっしゃいました。哲学で、一昨年、文化功労賞をもらわれました。そのＩ君は素質能力 100 点、自分は 30 点と、比べて悩んでいた。で、思いました。「30 点とか 100 点とか、私の責任ではない。Ｉ君の手柄でもない。神がそう造ったのだ。私の責任は、与えられた 30 点を 30 点なりに、これ以上できないというくらいフルに生かしまくることだ。そうだ、やってやる、やったらどうだ。これ以上できないというくらいにやりまくって文句あるか？」、と思った途端に、どこからか「文句なし！」と聞こえたんです。自分のどこかからはね返っただけだと思いますが、私としては、ものすごい大声で言われた気がしました。それで「そうだ、文句があってたまるか！」と思いましたら、一ぺんに劣等感が吹き飛んで、元気が出ました。声も大きくなりました。「馬場君、何が起こったんだ？　キミの歩き方！」とある友人が驚きました。今までこんな（うつむき加減の）歩き方だったのが、こんな（背筋を伸ばした歩き方）になっていました。声もびっくりするくらい大きくなりました。それまでの自分とは一変、大変化です。まず、元気が出ました。

（６）道が開けた。結婚もできた

そしたら次、不思議ですが、道が開けたんです。「元気が出た」というのを主観的変化と言うなら、さらに客観的変化が起こった。思いがけない就職と、さらに思いがけない結

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

婚です。Ｔという聖書の独自な読み方をするある一人の先生の本に出会い、ある集まりでその先生ご自身にお目にかかりました。しばらくして、その先生が「キミ、頼む、弟子になってくれ」と言われました。「先生、こんな私でいいんですか？」―「キミは珍しい素質を持っている。ワシ、育てたい」―「ありがとうございます。お願いします」―「ありがとう。ところで、ついでと言っては何だが、キミ、結婚しないか」―「駄目です、先生。私は家庭教師で、月収 15,000 円です。嫁さんの来手はありません」と言ったら、すごい大きな声で怒られました。「馬場君！」―「はい」―「キミはどうしてそうやって自分で自分を辱める言葉を平気で吐くか！」と言われましたから、「私、自分で自分を辱めたでしょうか」―「そうでしょうが。嫁さんの来手もないなんて」、「だって……」―「だっても何もあるものか。そんなに言うならワシがいい娘さんを紹介してやる」―「先生、お願いします！」。こんな男に来てくれる娘さんがこの広い世界にもし一人でもみえたら、絶対大切にさせてもらうと思いました。東大医学部に衛生看護学科が出来たときの初代の助手でした。こんな私にオーケーしてくれました。２日目に結婚しました。そしてその先生のお仕事を手伝いながら、先生の講義を録音から原稿にまとめ機関誌を編集発行する仕事をしました。また、間もなく妻のおなかに長男が身ごもっておりました。あんなに何年ものたうって人生に絶望していた人間が、一晩、本当に腹の底から真っ暗な夜空にわめき上げたら、半年もたたぬうちにこんなことになったと思ったら、‘人間のいのち’って何だろうと思いました。こんなプライベートな話を公の場で申し上げるのは恐縮ですけれども、私としては、この出来事が以後の人生の出発点、土台、根本となりました。今日「ヒューマンサイエンスから見たいのち」という題をいただきましたけれども、「あんなに見る影もなく落ちぶれていた自分を、あのどん底から立ち上がらせたもの、人間の‘いのち’とは何ものか!?」――自分の人生で自ら体験した「いのちの深さ」ということが、それ以後、私の全人生の中心テーマ＝「ヒューマンサイエンス」になったわけです。「この驚くべきもの！不思議なもの！」これを生涯かけて深め、多くの人に伝え生かしたい！それ以外に自分の人生はない、それが私に与えられた役目である！この体験が以後の私の人生の原動力となってきました。今日のテーマ『新しい生命観』を見たときに、胸にときめくものがありました。また、『ヒューマンサイエンスから見たいのち』という題には、「そうだ、『いのち』と言うものを『見る目』が大切だ」と思いました。「決して表面だけで見てはいけない」と。すべて物事は見る目＝見方によって見えてくる姿が大変違います。とりわけ相手が人間である時、そうです。まわりの人を見るときもそうですが、自分を見るときもそうです。まず自分を見るとき、つい、自分を低くいやしめて見がちですが、もったいないです。私もＴ先生から、大声で「キミはどうしてそうやって自分を自分で辱める言葉を平気で吐くか！」と怒鳴り上げられたとき、びっくりしました。意味がよく分からないほどでした。しかし、Ｔ先生は相手の、いや人間のいのちというものの深さを痛切に知っておられたからこそ、「私には嫁さんの来手がない」などという言葉にヒドク憤慨されたのだと思います。これは自分の‘いのち’の深さ、大きさに初めて目を向けさせられる体験で

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

した。

第２　まわりの人を見る目：「人を表面で見てはいけない」

（１）育ちゆく学生さんたちから学ぶ

さて、新しい道が開けたんです。そのＴ先生から学んだことはじつに多く、生涯の恩師と今も思っています。が、やはり宗教団体には難しい問題があり、５年後、夜逃げ同然で辞職することになりました。34 歳で子ども２人を抱えて失業です。しかしその失業の半年間、普通なら下を向いて悩むところでしょうが、私の場合、何か不思議に胸の深いところから希望が湧いて、「神様、今度はどんな働き場をこの馬場のために用意していてくださいますか？楽しみです」と木枯らし吹く青空を見上げて夢を見るように歩いていました。そしたら、奇跡的に名城大学が拾ってくださいました。英語の先生の急な辞職で専任のポストが空いたということでした。気が付いたら、柴山先生と同じ大学の教壇に立って、先生に習ったニューマンの『大学教育論』を教科書にして教えていました。不思議でした。「人間のいのちって何だろう！こんなに道が開けるとは！」と思いました。

さて、私には、学生さんに対する態度はハッキリしておりました。「表面で見てはいかん、と。ボロボロで点数がどんなに悪くても、私が立ち上がれたのだから、皆さんが立ち上がれないはずがない。人間のいのちはスゴイんだ！」と。「今日の一言は、胸に響きました」という学生がやってきたりしました。実際、どの学生を見ても、とりわけ表面がかつての自分に似ている人たちを見ると、いとおしくてたまらなくなりました。今、定年退職を間近にして前に、この 38 年を改めて振り返りますと、素晴らしい出会いの続出だったなあと、やはり感動です。

ある工業高校卒の子が推薦入学で入ってきました。中学３年まではおよそ勉強なんてしなかった。それで親は、「うちの子は、進学はとうてい無理だ、農業を継がせよう」と思った。ところが担任が「それはいかん。私の見るところお宅のお子さんは、何かをする子だ。とにかく、進学させなさい」と言うので、受験させたら何と工業高校に合格した。その高校で、教育の傍ら研究に打ち込んでいる先生の姿を見て、「こういう人生があるのだ」と思った。３年生になったとき、「このまま卒業して就職したら、死ぬまで勉強というものとは永久におさらばか」と思ったら、何やら淋しい気がした。それで担任に「僕のような者でも上級に進む道はないでしょうか」と相談したら、「私の母校に推薦入学の道がある」と言われ、それで名城大学の理工学部に来た。そして、「英語だけは何とかしてものにしたい」と願っていたら、不思議にアメリカからの留学生と知り合った。そこで国際問題に目が開け、アメリカ留学を決意、ついに経営学の修士号をとり、国際的に活躍するようになりました。

またある学生は、中学２年から不登校で、自殺未遂を繰り返し、高校は定時制で、それも卒業せず、大学入学資格検定試験で入学してきましたが、半年でまた不登校になりまし

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

た。しかし友人たちの励まして、アメリカに留学しましたら、別人のように勉強を始めました。人生目標を見つけたんです。日本で不登校を繰り返したのは、「いい学校、いい就職、安定生活――そんな人生に何の意味があるのか」分からず、こんな世の中に自分の居場所がないと思って自殺未遂を繰り返したのです。しかし、今は、「悩んでいる人を助けたい。臨床心理学を勉強して、カウンセラーになる。しかし、根本は哲学、宗教だ。それを専攻して、宇宙の根本真理に立ったカウンセラーになる」と別人のように勉強に打ち込んでいます。最近日本に一時帰国で来たときは、以前は無口でため息ばかりついていた彼が、爆発的に話し続けるので驚きました。

もう一人は、大学時代に重いうつ病になって、やっとの思いで修士号を獲得して、郷里に帰ってひたすら休養をしておりました。その彼が１年目、つい先週、飛び込んできまして、「先生！」と、もうはちきれそうに喜び溢れる姿でした。「いったい何が起こったの？」と聞いたら、郷里で休養中に「地球村」という環境保護運動の団体にフト入った。みんな生き生きして助け合いながら活動してみえる。自分も手伝ってその人たちと一緒にやっていたら、もう嬉しくて嬉しくて仕方がない。「先生、学歴からいうと、ボクが名城大学修士でトップで、他の人はほとんど高校卒ですけれど、学歴なんて関係ない！　先生、ボランティア活動、これ、最高！　先生、食っていけますよ」と言う。びっくりしましました。こうやって一人ひとり数えたら……、38 年分は数え切れないくらいです。人間のいのちに秘められた可能性の素晴らしさを学ぶ 38 年でした。

（２）終末期の患者さんたちから学ぶ

「いのちの深さ」について、もう一つ、看護師さんたちから学んできたことも大きかったです。私は、実は、妻が看護学の教員である関係で、臨床の看護師さんたちと 20 年あまり「終末期のケアのあり方」について勉強をしてきました。癌などになって、命があともう何日もない、あるいは何カ月もないという方たちとどう関わるか？　そういう人たちは、死と真正面から向き合っておられるので、非常に悩みが深いです。この方たちにどう関わったらいいかと、看護師さんたちは日夜真剣に思い悩み、勉強し、相談し合い、涙を流しながら、夜遅くまで、話し合われます。毎月１回のその研究会に私も参加してきました。　そこで学んだことは大変大きかったです。皆さん、癌であと何カ月という方は、ただ弱って死んでいかれると思われますか？　違うんです。それまで見せなかった隠れた心の深い面を顕わにされる。「あっ」と思うようなことをおっしゃる。もちろん、これには関わる看護師の関わり方が大問題です。それで、きょうは２人のナース（看護師）の事例を話させてもらいます。

Ａ子さんの場合

１人は小説家でもあって有名な方ですが、Ａ子さんとします。あるとき、ラジオで「看護の仕事は、３Ｋ、‘きつい・汚い・危険’と言って、ご心配をいただいておりますけれ

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

ども、私はご覧のとおりの体で大丈夫ですが、もっと素晴らしいことがあります。人間、死を前にしたときに、本当の深い姿を見せるということでございます」とおっしゃったから、「やった！この人もそうか」と思って聞いておりましたら、２人の患者さんのことを話されました。

１人目は肺癌の 48 歳の女性で、服装などから、いわゆる水商売関係の方と思われました。あとそんなにもたないというときに入院なさったのですが、お見舞いに来られた息子さんと娘さんが、なんと派手な服装！そして苦しんでおられるお母さんの枕もとで、キャーキャーワーワーと笑い転げている。何という子どもたち！と思ったそうです。そしたら、そこへ入って来られたご主人、これがもう、歴然としたヤクザさんと思えた。真白い背広で、歩き方はこう（肩で風を切るような）ですね。このご主人を見たとき、「まあ」と思ったら、「看護婦さんよオ、うちのやつ、あとどれくらいもつ？」と言われます。「先生は、あと３カ月か、長ければ半年もつ、とおっしゃいました」。するとご主人は何と言ったか。「しぶてえ、アマだなあ」と言ったんですね。それでＡ子さんは「なんてヒドイだんなさん」と、びっくりした。「しかし」、Ａ子さんはおっしゃいました、「それは私の間違いでした。表面でした」。いよいよ亡くなられる日、奥さまの脈がもう止まりかけたとき、息子さん、娘さんは、お母さんにしがみついて「母ちゃん、死んだらいかん、死んだらいかん」と泣きわめかれました。だんな様はというと、ベッドの上に飛び乗って、奥さまを抱き締めて「おれをほっといて死んでいく気か！」と泣きじゃくられたそうです。それでＡ子さんは「なんと素晴らしい、熱い家族愛か。私は間違っていた！」と思った。私はその話を聞いて、「すごいな」と思いました。「やくざ」などと表面で見たら駄目だ、と。

ところが、２人目の患者さんの話はこうでした。患者は立派な会社をつくられた社長さんです。「やはり肺癌で、背中が痛いので、１日 24 時間のうち 23 時間半さすって差し上げないとご機嫌が悪い。それで 23 時間半さすってあげて喜ばれるかといったら、さすれなかった 30 分のことで怒られる。極めつきは、同室の方が危篤になられた日、私どもナースもドクターも全員がその亡くなられた方に手が取られてしまって、つい、その社長さんのことに手が回りませんでした。そしたら、その社長さんが、『おれの背中をさするやつはどいつだ』と怒鳴られた。そのときはさすがに泣きました」と。

Ｂ子さんの体験

私はそれを聞いて「ノー、ノー！　違う、違う！」と思いました。後のほうの事例は結論が違う。と申しますのは、その１週間前に、私どもの自宅での終末期のセミナーで、Ｂ子さんとさせていただきますが、まだ 26 歳の看護師さんがおっしゃったことが焼き付いていたのです。

「先生、うちの病院の性格はホスピスです。72 歳の女性で、１人、本当に困った患者さんがいらっしゃるんです。それで、良かれと思っていろいろして差し上げるのですが、怒ってばかりおられるんです。私ども看護師８人は、この方だけはどうして差し上げたら

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

いいから分からない。もうお手上げでした」と。「それで私、ある朝決心しました。きょう１日だけは、どんなにあの方に怒られてもくじけないで、笑顔を絶やさないで、心を込めてお世話をして差し上げようと。それで体拭きをするとき、本当にこれ以上丁寧にできないというくらい丁寧に拭いて差し上げました。手足にきたときには、丁寧にマッサージをしました」と。そしたら、怒ってばかりいたその患者さんが、ポツッと何かおっしゃった。「えッ、何とおっしゃいましたか？」と聞くと、小さい声で「私、悪いことをいっぱいしてきた。許してもらわんといかん」と。「どなたにですか」と聞いたら、黙ったまま宙をじっと見ておられたそうです。ああ、許してもらう相手の人を一人ずつ思い浮かべて謝っているのかな、と思ったけれども、あんまり長いものだから、「もう十分でしょう。そのお気持ちだけで、もう十分通じていますよ。皆さん、きっと許していらっしゃいますよ」と言ったら、その患者さんはＢ子さんの顔を見て「ほんと？」と言われた。思わず、「本当ですとも！」と言ったら、「ありがとう」と涙をポロポロとこぼされたそうです。Ａ子さんの話で、この話を思い出したのです。だから「違う！」と。

「わし、許してもらわんといかん」

Ａ子さんの２番目の患者さんもＢ子さんの患者さんも、初めは同じく‘困った患者さん’でした。しかし、最終的に顕われた「本当の姿」は、「わがままな人」と「ありがとうと言う人」というように、正反対になったのです。なぜでしょう？　原因は、Ａ子さんとＢ子さんの姿勢の違いにあったと思われます。Ａ子さんは、いわば「自分の価値観の物差し」で相手を計り、「わがままな人」という結論を出した。これに対し、Ｂ子さんは、そんな物差しは捨てた。そして、とにかく今日１日だけはどんなに怒られてもくじけず、笑顔を絶やさず、ただひたすら患者さんのためを思って体拭きをした。すると、患者さんは思いがけない姿を見せた。その患者さんの心に何が起こったか、私は想像してみました。まず初め、なぜ怒ってばかりおられたのか？　人間誰しも死を前にしたとき、「自分の人生は何だったんだろう？」と振り返らざるにはおれません（ゆっくり亡くなる場合ですけど）。そして多くの場合、「何か、どこか間違っていた」と思う。すると悔いがある。しかし、今さらどうしようもない。死ななくてはならない。しかし、やはり自分が悪いとは思いたくないので、こうなったのも誰かのせいだと、つい恨みがましい気持ちになる。あるいは、自分は死ななければならぬのに、この人たちは生き生きとしている。つい周りの人全部が憎たらしくなり、八つ当たりをせずにはおれない気持ちになる... と、分かるような気がします。実際、終末期には「八つ当たり」をする患者さんが少なくありません。それは、周りの人が悪いのではない、本人の中に大きな悩みがあって、それが外側に出て、八つ当たりという姿をとっているだけです。それでその人に「怒ってばかりでどうしようもない、困った、知らない」と言ったら、どうしようもないです。しかしこの日、Ｂ子さんが決心してくれたんですね。今日１日だけは――明日、あさっては知らないけれど、きょう１日だけはどんなに怒られてもくじけずに笑顔で、と温かく世話してくれた。そうすると患者

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

さんはどう感じるでしょう。自分は怒ってばかりいるのに、この人はニコニコで「どうですか？」と言ってくれる。嬉しかったでしょう。どんなに怒っても怒り返さないんだもの。責めないんだもの。そうすると、「自分が許されている」という感じがしたでしょう。「自分が許されている」と思えたときに、初めて「自分が悪かった」という気になれたのではないでしょうか。それでスッとおっしゃったのが「私、悪いことをいっぱいしてきた。許してもらわんといかん」という言葉。これは皆さん、人が死ぬ前にしばしば見られる出来事です。

「ワシは悪いやつや。許してもらわんといかん」と、毎日朝から晩まで言われた患者さんもあります。若いとき妻に逃げられ、幼い息子を兄に預けて、以後各地を放浪し、５９歳で癌になり、浮浪者のように病院に引き取られた。「ワシは悪いやつだ」とあまり繰り返されるので、事情を知った看護師さんたちは、その息子さんが今どこにおられるか探した。ついに見つかった。それで、今は立派に成人し家族を持った息子に会うことができ、謝ることができた。死を前にしたこの患者さんの喜びようは大変なものでした。そして、誰を見ても最敬礼して「ありがとうございます」と繰り返し、そればかりか、周りの人を思いやる人になられました。自分が体拭きをしてもらったら、「お湯はまだ残っている？隣の〇〇さんも足を洗ってあげて」と、隣の人を思いやる方に変わられた。そういう事例もありました。「孤独と自責」から「感謝と愛の交流」への大変化です。看護師さんたちの温かい関わりが鍵でした。

Ｂ子さんの患者さんの場合も、「怒ってばかりいる」のは表面で、深いところでは、本当は「自分は悪かった。許してもらわねばならん」と思っていた。そしてＢ子さんの態度から、「許してもらえた」と分かった。そのとき本心がハッキリ目覚めた。すると「ありがとう」という言葉が出てきた。そしてぽろぽろと涙が流れた。

深いところで心のつながりが回復した

そのときにこの患者さんは、Ｂ子さんと深いところで心のつながりが回復した。Ｂ子さんだけはないですね。今まで自分に接してくださった方すべてに対して「ありがとう」と言って、心のつながりが回復されたと思います。そして間もなく亡くなられたのですけれども、最期の亡くなり方は安らかだったと思います。皆さん、Ａ子さんの場合とＢ子さんの場合と、どこが違うのでしょう。在宅で亡くなられた何人もの患者さんを最期まで見取ってこられたある訪問看護師さんが、「先生、はっきり言って、人間の最期、人生の締めくくりは、どういう看護師が関わるかで決まりますよ」と。ちょっと言い過ぎかなと思ったけれども、看護師の関わり方というのはそれくらい強いものがある。「名医にかかる、名医にかかる」と名医を探されるけれど、最期は「名看護師」に看取られたほうがよっぽど幸せだと思います。それで結論は、周りの人を見る目として、Ａ子さんは自分の価値観にとらわれていました。この人は社長さんというけれど、結局はわがままな人――「わがままな人」「困った人」というのは、自分が世話する上で困るんですね。困るのは“私”

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

なんですよ。自分が困るかどうかという自分中心の視点で見ると、相手の人はわがままで困った人となる。それがこの人の本当の姿でしょうか？ノーですよ。やはり、Ｂ子さんのように、自分の価値観で決めつけないで、“自分の都合”を忘れ、怒られてもくじけずに、ニコニコして、とにかくこれ以上できないくらい世話をしようと思ったら、相手が心を開いた。「ありがとう」と言って涙をこぼした。心が通じた。これがもっと深い人間の姿ではないでしょうか。私は、人間というのはやはり一番深いところは素晴らしいと思います。この「喜び」は、今日最初にあげた「３種の喜び」の 2 番目、「周りの人と深いところで心がつながり合って生きる喜び」です。そしてその中で亡くなっていく幸せ、これは最高だと思いますが、皆さん、いかがでしょう。

第３　大自然を見る目：「欲の曇りが拭われた目」

東山魁夷画伯の絵

つぎは、３番目の喜びです。皆さんのお手元の資料ですと、裏の右上をご覧ください。皆さん、この絵（『残照』）をご存じでしょうか。画家の名前はたぶんご存じだと思います。難しい字ですが、東山魁夷（かいい）です。私、この絵を初めて見ましたときに、絵のことはあまり分からないのですけれども、この絵だけは何かぐっと心の底に問いかけてくるものを感じました。「おまえ、何しとるんだ。ここで何をやっとるんだ」と問いかけられる感じです。言葉では上手く言えませんけれど、宇宙の奥底が何か私に語りかけてくる。実は、この絵が出来上がったのには不思議ないきさつがあるんです。

東山先生は 1915 年のお生まれで、神戸の船の道具を売る、繁盛したお店の長男さんでした。本当なら家の商売を継ぐはずですが、絵が大好きで、お父さんに頼み込んで東京の上野の美術学校（今の芸大）の日本画科に入学なさいました。そして、北欧、ドイツなどといったヨーロッパの国々に留学なさいました。ところが帰って来られてしばらくすると、お父さんが破産なさいました。大変な運命の逆転です。お父さんはショックで寝込まれました。お母さんも病気です。弟さんまでが肺結核で寝込まれました。

そうすると家族３人を養う責任は、駆け出しの画家の東山先生の両肩にかかりました。売れない絵描きさんで、仕事を探し回ってやっと子どもの雑誌の挿絵をもらって、その日暮らしをしておられました。36 歳でしょうか、日本の敗戦の直前、昭和 20 年の春に、兵隊になれという召集令状が来た。配属先は熊本です。九州に上陸してくるアメリカの戦車隊を迎え撃つためです。しかし、大砲も飛行機もありません。砲弾を抱えて、上陸してくる戦車に向かって走って突撃する肉弾攻撃しかない。毎日、死ぬ練習です。ところが７月 10 日、熊本の町がアメリカ軍のＢ29 の爆撃で一晩で灰になりました。兵隊さんたちの翌日の仕事は焼け跡整理です。焼け跡整理というのは棒杭を整理して燃やすことぐらいではないです。人間の焼けただれた体、飛び散った体を焼くんです。私の父も、岐阜住まいで

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

したが、名古屋で三菱重工が爆撃されたときに焼け跡整理をしました。「俊彦や、人間の腿（もも）というのは重いもんだぞ」と。飛び散った腿を担いで焼いたんです。東山先生はそれをなさいました。どんな気持ちだったでしょう。

心の目の曇りが晴れた

その日の昼休みです。「休憩！」というわけで、熊本城の天守閣の焼け跡に登った。フト目を上げましたら、目に映ったのは、いつも見慣れた阿蘇の山並みと緑の稲が波打つ田んぼです。その風景が、まるできょう初めて見るかのように、荘厳な美に輝いていた。体が震えた。涙がこぼれそうになった。そして「ああ、残念、自分は風景画家といいながら、今まで何を描いていたのだろう。自分はこれを知らなかった。でももし命拾いしたら、絶対これを描く」と決心をなさった。そしたら一月余りで敗戦となり、命拾いをされた。それで衰えた体を引きずって、全国の山々を巡り歩かれた。千葉県のある山に登られたとき、体が弱っておられたのか予定より時間がかかって、目的の場所に着いたら日が暮れていた。やはり失敗かと思ってフト目を上げたら、この光景だったのですね。皆さん、いかがでしょう。画面の一線から下が暮れている。その一線の上の真ん中あたりに、３つの寄り添う峰に夕日が映え、遠くの峰々も夕日のなかにかすみ、何とも言えない姿――東山先生は、これをついに描き上げられた。小さな壁一面くらい大きさの絵です。皆さん、実物をご覧になったら、もっと感動なさると思います。東山先生はこれで日展特選一等賞を獲得、一躍、有名になられた。以後、日本第一の日本画家としてどんどん活躍なさいました。

この絵（『山国の秋』）は先生が 18 歳のときの絵です。同じく山を描かれた風景画ですが、先の『残照』と見比べると、まるで別の人の絵としか思えません。これも日展入選だそうですけれども、どう見ても何か表面的で、きれいだな、整った構図の絵だな、ぐらいです。上手な高校生ならこれくらい描くな、と言ったら怒られるかしれないけれども。

これに対して、戦後命拾いして初めて描かれた絵『残照』のほうは、どうでしょう。感極まるものがある。何か表面的な『山国の秋』に比べると、表面どころか、宇宙の奥底がこちらの心の奥底に語りかけてくるものがある。人物も何もいないです。何が先生の絵をこんなに変えたのでしょう？　東山先生ご自身はこう書いておられます。「私はそれまでこの絵、大自然の本当の荘厳な姿が見えなかった。心の目が欲に曇っていたからである」と。
これが「大自然を見る目の囚（とら）われ」ということです。

すべての欲が拭い去られた

それまで東山先生は、自分は何としても家族を養わなくてはならない。それには絵が売れてくれないと困る。友達はどんどん有名になって画壇の寵児となって名が売れてくる。

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

自分だけは挿絵画家で、やっと食っている。なんとかして有名になって、売れる絵を描いて、親を喜ばせたいものだ、と思っておられた。これは一種の価値観です。もう少し言うと欲です。名誉欲、金銭欲です。それに囚われている間は自分の心の目が曇っていた。曇っていた目に映った風景はまあまあ… 。しかし、肉弾攻撃の練習を繰り返すさなかに、飛び散った体を見られたんです。「自分もこうなるんだ」と、避けようのない死と向き合われた。先生はこうおっしゃいます。「死を間近に感じたとき、心の目からすべての欲が拭い去られた」。そして、その澄みきった目に映った世界は、荘厳な美に輝きわたっていた。先生はこの体験を「風景への開眼」と名づけられました。もともと宇宙、世界、大自然そのものは、初めから最高の美、荘厳な美に輝いているわけです。だが、私たちの目が曇っていて欲の目で見ているから、見えないだけです。欲の曇りがなくなり、目が澄み切った時、大自然の本来の美、真の姿が見える。これが「大自然のいのちを見る目」です。「この絵、私、欲しい」と言ったら、友人に「あなたの全財産と家屋敷を売っても、とうてい買えないよ」と笑われましたけれども、何十億円か払ってこれを買っても、心の目が曇っていたら、これは分からない。けれども、心の目が澄んだときには何十億円など要りませんね。何を見ても最高の美に輝いている。名城大学を歩いているだけで、空を見たら雲――何十億円で出しても買えない最高の美です。校庭のちょっとした木でも、いつも楽しい顔をしていますね。こんにちはと言いたいくらい美しいですね。私は一本一本の木が友達です。

樹々と対話する心

ここで、もう一つ大切なことが東山先生に起こっています。さきほど私は東山先生の絵から「何かが語りかけてくる」と申しましたが、このプリント（22 ページ）の右上端のところをご覧ください。≪樹々は語る≫という個展の会場に掲げられた先生の言葉です。

「樹々は生きている。そして、常に私たちに語りかけている。しかし、それは耳に聞こえてくる声ではない。私たちの心が澄んでいるとき、心に響いてくる声である。樹々と私たちとの間に対話が交わされるとき、樹々も人間もこの地上に生命を与えられて、ともに生きている同士であるとの想いが湧き上がってくる」。

心が澄んでいるとき対話が交わされる、とある。皆さん、樹と対話するという感じをお分かりになるでしょうか。そういう方はいらっしゃると思います。そのときに、「樹々も人間も共にこの地上にいのちを与えられて、共に生きている同士であるとの想いが湧き上がる」。まさに『自然と人間の共生』というこのＫＯＳＭＯＳフォーラムの大テーマそのものです。「大自然と人間と、本来は一ついのちに生きる同士である」との想い――これが東山先生に起こった、もう一つの大きな目覚めです。心の目が澄み切ったとき、大自然がその最高の美・真の姿を見せてくるなら、心の耳が澄み切ったとき、大自然が語りかけてくる。

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

講師　馬場　俊彦（名城大学大学院教授）

《我と汝》と《我とそれ》

次に、プリント（22 ページ）の右下半分に、「参考：《我と汝》」と書きました。これはマルチン・ブーバーという哲学者の本の題ですが、その第１ページにこう書いてあります。

「世界は我々がそれに対してとる２通りの態度によって２通りとなる」。

世界というのは１通りだと思うかもしれないけれども、実は、我々人間のとる態度によって、２通りになると言うんですね。その２通りの態度というのは、代名詞の簡単な組み合わせ、《我と汝》、《我とそれ》で表せる。私は、この本の第１ページを読んだとき、それまで学問上悩んでいた大問題がスカッと解けた気がしました。この１頁を読んだその夜、夜空が金色に光って見えたような気がしました。ちょっとプリント（22 ページ）の挿絵を見てください。“我”が世界に向かって“汝”という姿勢でかかわると、太陽がほほ笑んでいるんですね。山が語りかけてくる、草や花がニコニコ笑っている、鳥が歌っている、生き生きとした世界です。太陽も花も山も何かを語りかけてくる。すべては“汝”、人格である。“共に生きる仲間”である。しかし、そんなことを言ったら、今の常識は「何を言っている。君の話はアニミズムだ。太陽が笑っている？　それは詩的空想。乙女チックな、ロマンチックな空想。美しいけれど、空想だ。現実は、太陽は水素の融合で物質。花は細胞の塊で、花があっち向いたりこっち向いたりするのはホルモンの都合だ」と言うでしょう。「葉が明るいほうを向くのは日光に憧れているのだ」と言ったら、「いや、あれはホルモンの関係だ」と言われました。《我とそれ》という姿勢で見ると、世界は全部“それ”です。物質の運動です。太陽、花は物質で、人間の微笑も筋肉の微妙な運動にすぎない、ということになる。そして、すべては研究の対象。法則を発見したらそれを使って対象を操作し、うまく利用する。すべては研究・操作・利用の対象。“共に生きる仲間”ではないですね（もちろん元来の自然研究は、ただ大自然の神秘を探りたいという純粋な気持ちから始まっているでしょう。しかし「知は力なり」と言って、すぐ操作と利用の態度に繋がっていきました）。“汝”としての世界と“それ”としての世界と、どちらが私たちにとって、本当の現実でしょうか。私を育ててくださった柴山先生は、「自然科学では、『太陽が中心にあってじっとしていて、地球がその周りを回っている』と言うが、オマエ、それを見たか？　実際見ているのはやっぱり太陽が東から出て西に沈むと言うことではないか。それを『太陽がじっとしていて地球がその周りを回っている』というのは、説明に過ぎない。間接的現実、セコハン的現実だ。我々にとって生（なま）の直接の現実は あくまでも太陽は東から昇って西に沈むということだ」とおっしゃっいました。ブーバー先生はその直接の現実を、“汝”としての世界と見ました。そして東山先生は、欲の曇りが拭われたとき、澄み切った心の目に映るのは、“私たちの心に常に語りかけている世界”だと体験されたのです。また、樹々と私たちは、いやあらゆるものは、“共に一ついのちを生きる仲間”だと。

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

講師　馬場　俊彦（名城大学大学院教授）

大自然と共に生きる喜び

最後にまた、死を前にした患者さんの事例です。ある立派な会社を作られた社長さんで、年を取って会社を息子さんに譲って、退職された。それで何をされたかというと、自分の裏庭を耕して果樹園を造られた。そして柿やミカン、いろいろなものを育てて喜んでおられた。ところが、癌になられました。癌になって入院というのは大変な出来事ですね。入院中、本人は「うちに帰りてぇ、帰りてぇ」と繰り返された。私の父も重い病気でしたけれど、亡くなる前は「うちへ帰りてぇ、帰りてぇ」と毎日言いました。この方はさらに「青葉が見てぇ」と繰り返されました。「柿やミカンにほおずりしてやりてぇ」。柿やミカンにほおずりしたい、これは《我と汝》でしょう。人生ぎりぎりのところで一番あこがれるのは、柿とミカンにほおずりしてやりたいという、この《我と汝》の生き方ではないでしょうか。また、「オレ、こんな病気、あそこに行ったら一ぺんに治る」と言われた。癌の末期ですよ。それでご家族の方が考えて、実のついた柿とミカンの立派な枝を切って来て、大きな花瓶にさし、病室にすえて「お父さん、これ、どう？」と言ったら、「あかん、こんなもんあかん。あの庭に行かんといかん」と言われた。死に向かって人は深い心が目覚める。本心が目覚める。そのときに《我と汝》の現実、樹々と共に生きる喜び、大自然、≪花と緑≫と共に生きる喜びを切実に求める。これが人生究極の価値ではないでしょうか。

気付きさえすればいい

こんなことを申し上げると、きっとこんな質問があると思います。「あなたの話を聞いていると、何かもう、死とぎりぎりに向き合わないと人間の深い心が目覚めてこないように聞こえる。けれども、私たちは、しょっちゅう死に向かっているわけではない」と。ある方は「そんな目が開けるためには、何か特別な宗教的修行でも必要なのでしょうか。比叡山を 1000 回まわるとか」と言われるかもしれません。そんなのはくたびれるだけですよ。そうじゃないんです。私の答えは「ノー、修行なんて要らない」と言うんです。逆です。修行にも挫折する自分、くたくたで「もうあかんわ。ボク、もう何の見込みもないわ」と疲れ切ったときに、ふと気付くと、そんな自分を大自然が温かく包んでいる。オルロー・ストランクという心理学者が言いました。「現代西洋文明は業績達成中心の文明である。何でも成し遂げないといけない。だから若い人はみんな、目標を持って、必死にしゃかりきになって頑張るけれども、たいがいくたびれる。くたびれてしまって、『オレ、駄目だ』と思ったときに、フト気が付くと、なんと、美しい樹々が、雪が、雲が取り巻いていて、優しい子どもが『パパ、この花、どう？　プレゼント』と小さな花束を持ってきてくれる。ガソリンスタンドの人が、温かい一言をかけてくれる。何と幸せだ！」と。

皆さん、気付きさえすればいいんですね。星野富弘さんという方をご存じでしょうか。憧れの体育の教師になって３カ月目に、鉄棒の大車輪演技から飛び降り損なって、肩下から全部麻痺してしまわれた。そしたら、口に筆をくわえて絵を描き詩を書くことを始められた。その詩画集の中にこんな１頁があります。ピンク色のシクラメンの花が描かれた横

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

に「今日は何もしないでいよう　そう思った日ほど　花が私にいつもより身近に感じられる」と一言だけ書いてあります。「もうできない。自分、もう絵も描くのもしんどいわ。今日は休もう」と思って、何もできないとあきらめたときに花を見ると、花がいつもより身近かに感じられるんですね。これこそが最高の幸せだ、と。

私、国立病院の看護学校に講義に行っていました。「きょうも講義だ」と思って地下鉄の出口を出ましたら、あの病院は大きな欅（けやき）の木が取り巻いています。何十年もたった大木たちです。フト根元を見ると、その下草の草むらに木漏れ日がチラチラとあたっていました。そのチラチラと日の当たっている草むらを見たときに「ああ、ボク、死ぬとき、この草むらで草に囲まれて、ほおずりしてもらって、スッと寝られたらいいなあ」と、フト思いました。一番安らかな死。でも人間はそんなに安らかに死ねるとばかり決まっていません。どんな事故で、いつ急死するかもしれません。しかし最期のぎりぎりのところ、挫折して傷ついて死んでいく自分を、美しい草むらあるいは木が見守り、優しく包んでくれていると気付いたときに、人生最高で、安らかに逝けるのではないでしょうか。

結論　　囚われから開放されるとき

今日の結論です。「21 世紀の新しい生命観」はまず、囚われから解放された見方から始まる。囚われた見方とは、まず第１、自分を見るときは、他の人と自分を比べたり、社会通念の見方で自分を見て落ち込んだりして、自分独自のいのちの尊さと、世の中での役割に気づかないことです。そんな囚われから解放されるとき、秘められた‘いのち’が生き返ります。第２、周りの人を見るとき、世間一般の、あるいは自分なりの狭い価値観の物差しや、「私が困る」などという自己中心の視点で相手を判断することです。それから解放されるときには、相手の良さ、尊さが見えてくる。相手と心が通い合い、愛の交流に生きることができる。最後に第３、大自然を見るとき、金もうけとか、業績達成とかといった価値観に囚われていることです。それから解放されるときに、最高に美しい大自然が今さらのように心に映じてくる。そして、その大自然の花と緑に囲まれている中で生かされている自分を発見する。すべての囚われから解放されるとき、自分と、仲間と大自然の尊さがわかり、心が深いところで通い合う。その大きないのちの交流の中で本当に人間らしく生きる喜びが回復される。その回復への道は、特別な修行ではなく、ただ自分の囚われに気づくことにある。皆さん、長い時間ご清聴ありがとうございました。

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

講師　馬場　俊彦（名城大学大学院教授）

当日配付資料

KOSMOS フォーラム《21世紀の新しい生命観を探る》 2005. 3. 13
国際花と緑の博覧会 記念協会
—ヒューマンサイエンスから見たいのち—
名城大学　馬場俊彦

問題意識：
今までの20世紀の生命観では21世紀はやってゆけない → 自然環境の破壊 / 人間らしい生活の喪失

では，どこがまずいか？
今までの見方 ＝ ‘何か’にとらわれた見方 → 表面のオカラ いのち
新らしい見方 ＝ とらわれを捨てた見方 → いのちの深さ
① 自分として生きる
② 他の人々と生きる
③ 大自然に包まれて生きる
かけがえない
ハチキレルような喜び
自然と人生の共生
《花と緑》の中で

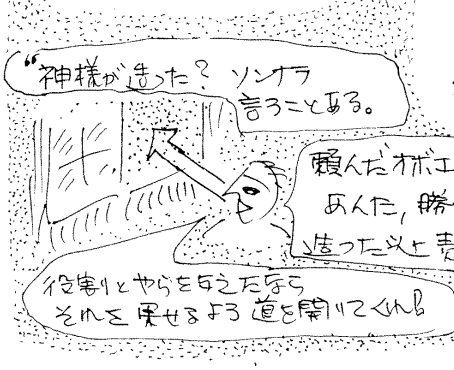
‘何か’にとらわれた見方とは？
例 ある教務主任：「お母様方の中によく“ウチの子はやれば出来るのに…”とおっしゃる方．しかし“やれば出来る”なんて…．大切なのは出てきた点数」
コレダケ
とらわれた見方 ＝「点数だけ」という価値観
かくれたものを見ようとしない → いのちの深さは見えない

とらわれた見方 ＝ (1) 自分を見るとき (2) 他の人を見るとき (3) 大自然を見るとき．

(1) 自分を見るときのとらわれ

実例 トシヒコ君：28才のある夜 自殺しようと頸動脈にナイフを当てた。

理由：‘人生の道を踏み誤った’ ＝ もともと機械いじり好き（理工系）
人生の根本・土台になるものを求めて 大学・哲学へ
修士論文 ＝ 博士課程 NO!!　新しい任教授
① 本読み ② レポート ③ のゴッキゲン損ねた
その時：浮んだ父と母の顔！ 貧しい中から大学にまで…
“親の苦労が全くのムダになる！”
“ココで死ネルカ？”（心のすみの小さな声）
生きるに生きれず，死ぬに死ぬず 泣きだしたとき 夢：
お世話になった小さな教会の牧師の声（いつか聞いた説教）
“皆さんの中にご自分のことをツマラナイ存在と思ってられる人がいらっしゃいますか？ その人はトンデモナイ間違をして…．
それは，ご自分の目でご自分を見てそう思っているだけ…．
もっと大きな目＝宇宙をお造りになった神様の目から…．
あなたはなくてはならない大切な人です
どの方にもどの方にも，あなたでなくては果せない大切な役割も与えてお造りになった。…”



机もたたき，床をころげまわって
柱に頭をぶつけ　絶叫 2時間 ワケワカラン

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

講師　馬場　俊彦（名城大学大学院教授）

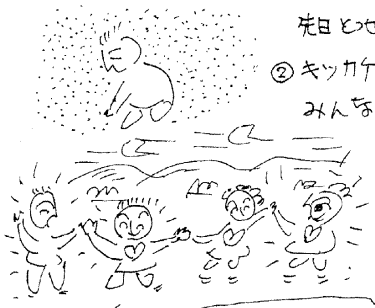
当日配付資料

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

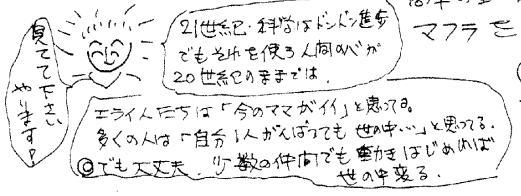
講師　馬場　俊彦（名城大学大学院教授）

当日配付資料

■実例集(3) マサヤ君



① 大学1年生のころ：元気！　2年ごろから元気↘ 3・4年→修士：重いうつ→郷里で休養
先日とつぜんやって来た。まるで別人のように ハイキレそうに元気、キラキラ光輝いてる。
② キッカケ：郷里金沢の町で、地球環境を守る活動をしてる仲間に出会った。
みんな生き生きして輝いて活動。温かい友情で包んでくれた。その中で
"自分にも出来ることがある！" 活動参加。仲間の仕事を手伝うバイト、
ハデな就職しなくて良かった。（うつのため修士号とっても就職できなかった）
③ 自分は"修士"で 学歴はいちばん高い。そんなこと カンケイない。
仲間の多くは高卒。皆 生き生きと輝いて活動している。
高卒の重いうつだった女性。アフガニスタンの子どもたちのために
マフラ ≒1000m →1300mできた。今 キラキラ光輝いて活動



マサヤ君の立ち直りの秘密は？
＝温い仲間の友情のつながりの中に包まれて
自分でも 言葉かのお役に立てることを発見
《学歴なんてカンケイない！ ボランティア最高！》
新しい価値観発見！

(2) 他の人を見るときのとらわれ

■実例集(4) 看護師 A子さん："看護のしごとのありがたいところ：人間の深いほんとうの姿が見える"
（特に死の間近い患者さん）

① 一見"ヤクザ"ふうの家族
ガン末期者：ハデな化粧、指輪、
息子・娘：末期ガンの母のそばで大さわぎ
夫：「うちのやつ、あとどれくらいもつ？3ヶ月？しぶてエあまだ」
最期の場面 息子・娘 夫
"熱い家族愛！"

② 一見"立派な社長"ふうの男性（ガン末期）

毎日 23.5/24 時間 背中をさすってあげる
感謝どころか、さすらない 0.5時間 が不満
きわめつき：同室の人の臨終のとき "オレの背中さするやつどいつだ！"
"わがままな人"
"困った患者"
"ほんとうの姿"？

■実例集(5) "困った患者さん"と 看護師 B子さん

―ある日の決心―
"今日1日だけは、どんなに怒られても くじけず
笑顔を絶やさず、心をこめて ケアしよう"
―体拭き：これ以上できないくらい ていねいに
手足はマッサージつき。
患者さんが珍しい言葉
なぜ怒ってばかり？

何が起ったか？
"こんな私に怒り返さない！
温い笑顔で
心からやさしく"
↓
ゆるされている
実感
↓
"アリガトウ"

死を前に
自分の人生
何だったのか？」
↓
何かが間違った
（悔い）
↓
自分が悪いと
思いたくない
↓
周りの人のせい
↓
八つ当り

まとめ： A子さんとB子さんの違い

A子さん：自分の価値基準で
相手を測った。
《相手のほんとうの姿》
＝"困った患者、わがままな人"
心のつながり＝断絶のまま

B子さん：
自分の価値基準で
相手を測らなかった
《相手のほんとうの姿》
＝"ゆるしてほしい"真心の人
＝心のつながり回復⇐"アリガトウ"

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。

講師　馬場　俊彦（名城大学大学院教授）

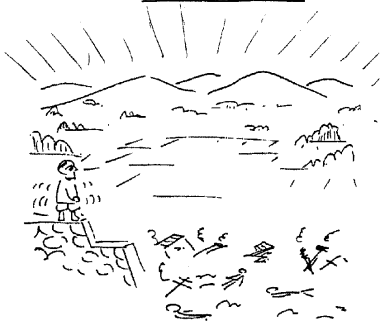
当日配付資料

(3) 大自然を見るときのとらわれ

《樹々は語る》展

「樹々は生きている。そして、常に私たちに語りかけている。しかし、それは耳に聞こえてくる声ではない。私たちの心が澄んでいるとき、心に響いてくる声である。樹々と私たちの間に対話が交わされるとき、樹々も人間も、この地上に生命を与えられて、共に生きている同士であるとの想いが湧き上がってくる」

事実例則(6) 東山魁夷 画伯



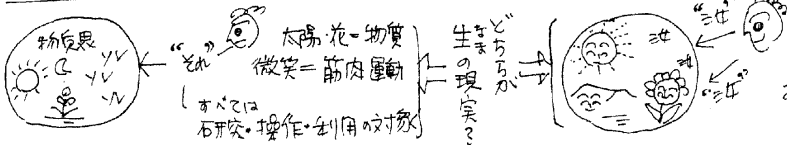
神戸の裕福な船具商の長男：絵が好き
家業を継がず、東京美術学校 日本画科に
ヨーロッパ留学 → 帰国 → 父の破産
辛い絵で 病の家族(父・母・弟)を癒す
昭和20年、召集、熊本連隊、原爆投下の訓練
7月10日　熊本空襲、一夜にして灰燼
焼跡整理出動 → どんな気持？
フト 目をあげると
ふだん見なれた阿蘇の山容と熊本平野が
はじめて見るかのように 荘厳な美に輝いていた!
涙が出るほど、感動！「命拾いしたらぜったい描く」

命拾い！ ⇒ 大作「残照」日展特別入選 → 一躍、日本画の第一人者 → 有名
若い時の作品「山国の秋」(1928) ⟷ 「残照」(1947)
└上手な作品（何か表面的）　宇宙そのものの心が感じられる、
何かを私たちの心の奥底に語りかけてくる

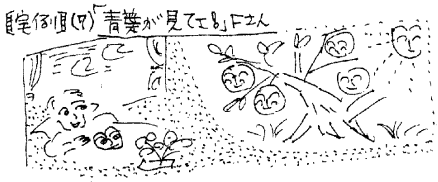
◉何が起こったか？ —
それ以前：「売れる絵を描いて、有名になりたい」→ 死と向き合う → 心の曇りが拭われ 心が澄みわたった
まとめ《とらわれ》金銭欲 名誉欲 ⟶ 断念 ⟶ 澄みきった眼に映ったのは、世界の完全美！
《人生究極の価値》⟶ 世界の完璧の美＝無料、心の眼が澄めば、全てが光輝いているのが分る。
大自然との対話、共に生きる喜び

参考《我と汝》大自然・万物と共に仲間として生きる喜び

マルチン・ブーバー："世界は我々がそれに対してとる2通りの態度によって2通りとなる。《我－汝》と《我－それ》



事実例則(7)「青葉が見てエ」F さん



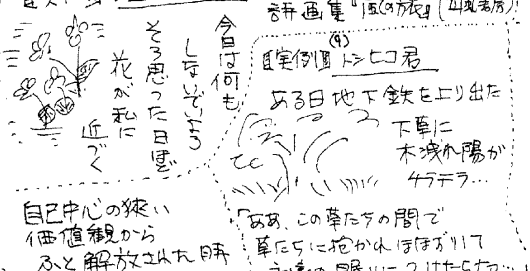
生涯かけて、立派な会社 ⇒ 息子にゆずり退職 ⇒ 家の庭を果樹園に
やがて ガン → 入院 → どんどん進行
「家に帰りてエ！ 青葉が見てエ！ 柿やミカンに 頑ずりしてやりてエ……
「こんな病気、あそこへ行けば ペンに治る……
(家族が、実のついた柿とミカンの切枝を病室に)←「コンナンじゃだめだ」

疑問？

"死と向き合わないと、'心の眼'は開けないのか？
—我々は、ふだん元気、死と向き合わない。
何か特別な修行でも？……

答 "No！ 逆に、修行にも挫折、クタクタのとき
ふと気づくと、そんな自分を 大自然が
あたたかく包んでいるのに気がつく。
成果主義 ⟩の現代、病めるとき、フト見ると
業績主義　今、現在、美しい自然が自分を取巻いている！
（何もできない）

事実例則(8) 星野富弘さん（首から下マヒ、口に筆で詩画集『風の旅』（立風書房）



自己中心の狭い
価値観から
ふと解放された時
花と緑の大自然の中で
生かされている自分を発見！
＝結論！

財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
内容・写真等の無断転載・引用を禁じます。